

ドナウ の 四季

2015年・夏季号・No.27

日本の若者は何をしている	盛田 常夫	1
2015年春のブダペスト	赤松 林太郎	2
マエストロ・コバヤシから得た感動	栗田 順子	4
マエストロ小林がハンガリー人に愛され続ける理由	桑名 一恵	5
コバケン「我が祖国」モルダウ	森田 友子	6
我が子はオヴオダツ子	吉田 恵子	7
ある都市と夢	色平 卓郎	8
高校生達を一つにする日本語コンテスト	ネーメット・ニコレッタ	10
大学生活の思い出	レーヴァイ・ナードル	11
オリンピックに向けて	田邊 夕貴	12
留学生自己紹介	花岡 沙季	13
	服部 志野	14
	上原 彩希	15
みどりの丘日本語補習校	越野 絵美	16

日本の若者は何をしている

盛田 常夫

に右往左往するのは目に見えている。

安保法制の国会議論が始まった頃、テレビやスポーツ紙ではAKB48の総選挙とやらで沸いていた。翌朝のニュースで、中継したフジテレビに「抗議が殺到」とあった。然(さ)もありなん。一億脳天気で、「国家の大事に、AKB中継で馬鹿騒ぎしている場合か」という抗議かと思ったら、何のことはない、選ばれた子供たちの決意表明が途切れて放映され、良く聞けなかった抗議だという。子供の学芸会番組をゴールデンアワーで中継するフジテレビの文化・知的水準も低い、それに劣らず白痴番組に一喜一憂する視聴者の知的レベルは嘆かわしい。選挙権を付与する年齢を下げたばかりだが、日本の子供たちの文化・知的レベルは戦後最低の水準にあるのではないか。

私が大学に入学した1966年は、1960年の安保条約反対運動や1965年の日韓条約反対の運動が終わった学生運動の過渡期にあたる。1965年はまた、フランスに代わって南ベトナム政府をテコ入れたアメリカが、北ベトナムへの爆撃(北爆)を開始した年で、これ以降、ベトナム戦争は泥沼の闘いに入り込んだ。アメリカは膨大な地上軍を投入し、ベトナムの北半分をナパーム弾で焼き尽くし、ベトナム人を100万人以上も殺戮した。しかし、その甲斐もなく、5万人を超える犠牲を出したアメリカは、国内だけでなく、世界各地のベトナム反戦運動に押され、ベトナムから撤退せざるを得なかった。

アメリカが政府を挙げてベトナム戦争の総括を行ったのにたいし、アメリカ軍基地の全面使用を容認せざるを得なかった日本政府は何もしなかった。ベトナム戦争終結から40年、アメリカは再びイラク戦争を勃発させたが、開戦理由に根拠がなかったことが明々白々になっても、後方支援を行った日本政府は一切総括を行っていない。開戦直後に支持を表明したイギリスでは、国会でイラク戦争を厳しく検証したのとは大違いだ。軍事主権をアメリカに掌握されている日本に発言権はないから総括する必要がないのか。そういう自主自立精神に欠けた日本が集団的自衛権行使を容認すれば、アメリカが惹き起こす戦争

で、「最高裁が自衛権を認める判断を下した唯一の憲法判断だから、これに則れば、集団的自衛権を認めている国際連合に加盟している国には、集団的自衛権の行使が認められる」と、60年前の判決から新しい解釈を「発見」し、これを解釈改憲の根拠にしている。

政治家は前言を翻しても平気な厚顔無恥な人たちのだろう。しかし、物事は都合良く行かない。アメリカで解禁された外交資料から、砂川判決を主導した最高裁判所田中耕太郎長官が、判決前にアメリカ大使に報告に行っていたことが明らかになっている。砂川判決はアメリカの事前の了解を得た屈辱的な判決だった。それもそのはず、サンフランシスコ条約締結で駐留軍を撤退させる必要のあるアメリカは、軍を継続的に駐留させるために、「駐留は違憲」という判決を阻止しなければならなかった。砂川判決こそ、米軍駐留を半永久的に合法化する、それこそ右翼が好んで使う「売国」判決である。「売国判決」を根拠に、アメリカの軍事戦略の後追いを合理化する安倍政権は、日本をアメリカの軍事利益に従属させる「売国」政権と言われても仕方がない。高村「発見」はやぶ蛇になったが、高村氏自身がそれに気づく知性を持ち合わせているかどうか。

1956年はハンガリー動乱が勃発した年である。ハンガリーの戦後史において、1949年のライク外相処刑と1958年のナジ・イムレ処刑は取り返しのつかない汚点である。前者の裁判では、裁判所からソ連顧問団へ電話回線が敷かれ、裁判の様子が逐一報告されていた。判決や刑執行についても、事前事後に、スターリンとラーコシの間で何度も意見が交わされた。1958年のナジ・イムレ処刑でも、ソ連共産党と何度も意見交換が行われ、最終的にカーダールが自らの権力を安定させるために、死刑執行を選択したものだ。

日本もハンガリーも、今なお、戦後占領の重い負の遺産を背負っている。

(もりた・つねお

「ドナウの四季」編集長)

温熱治療のパラダイムを転換する

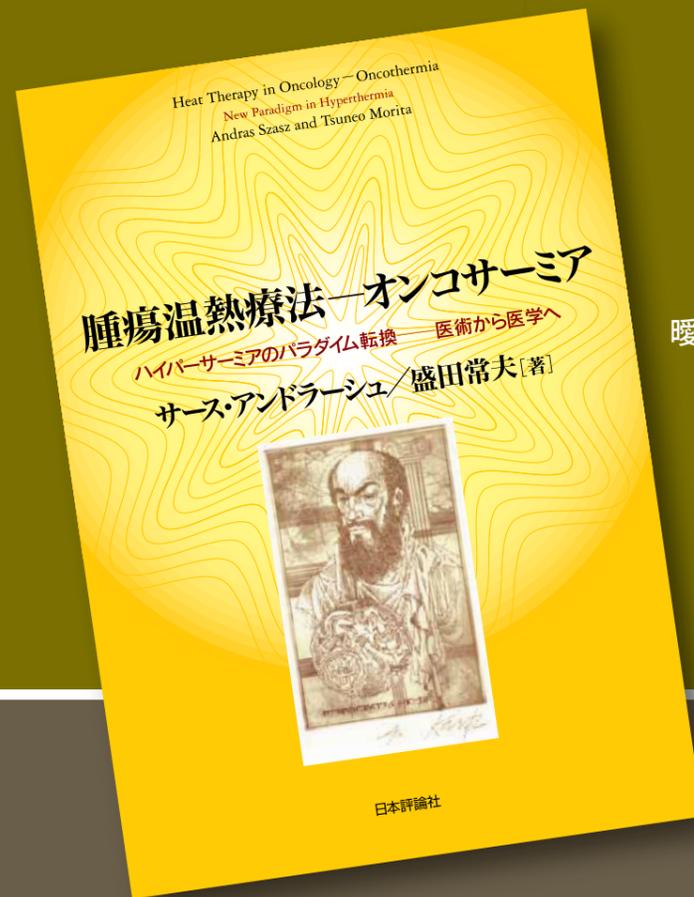
温熱治療を根本から見直し、
あるべき手法を示した著書。

曖昧な日常知を科学によって解明した画期的な著作。

オンコサーミア治療器は世界25カ国で利用。
ドイツでは百か所以上のクリニックで、
韓国の主要な大学病院に設置。

好評発売中。定価3200円+税。
大手書店、Amazonにて購入可。

- 第1章 ハイパーサーミアの歴史と評価
 - 1.1 ハイパーサーミアとは何か
 - 1.2 ハイパーサーミアの曖昧さと課題
 - 1.3 ハイパーサーミアの歴史的概観
 - 1.4 腫瘍治療のハイパーサーミア
- 第2章 ハイパーサーミアの物理学
 - 2.1 電磁気学の基礎概念
 - (1) 電磁気現象
 - (2) 電場と磁場
 - (3) キャパシタ
 - (4) 位相シフト
 - (5) インピーダンス
 - (6) 電磁波
 - 2.2 バイオ電磁気学
 - (1) 電磁波スペクトル
 - (2) バイオインピーダンス
 - 2.3 「非熱」効果
 - (1) 非温度依存 (NTD) 効果
 - (2) 電磁場におけるNTD効果
 - (3) 電磁気による目標選択
 - (4) 電磁気と生体システム
- 第3章 ハイパーサーミアの生理学
 - 3.1 生体におけるエネルギー、熱、温度
 - 3.2 生体における温度制御
 - 3.3 生体の加熱と体温
 - 3.4 加熱による温度の分布
 - 3.5 全身加熱と局所加熱の本質的な差異
 - 3.6 加熱と冷却: リスクとその回避
 - 3.7 温度測定と熱積算量 (ドーズ)



- 第4章 腫瘍温熱療法
 - 4.1 腫瘍温熱治療の基本概念
 - 4.2 ハイパーサーミアの手法
 - 4.3 熱の作用と併用効果
 - (1) 熱と血流
 - (2) ハイパーサーミアの併用効果
 - 4.4 ハイパーサーミアの熱生成
 - (1) アンテナ放射
 - (2) 磁場 (コイル)
 - (3) 容量性カップリング
 - (4) 伝導加熱
 - 4.5 ハイパーサーミア治療が抱える問題
- 第5章 オンコサーミアの理論と方法
 - 5.1 電場の利用
 - 5.2 細胞燃焼
 - 5.3 腫瘍治療における細胞加熱
 - 5.4 ミクロスコピック加熱
 - 5.5 集束化の原理
 - 5.6 温度の役割
 - 5.7 安全性
 - 5.8 積算量 (ドーズ)
 - 5.9 臨床事例
- 第6章 自然療法としてのオンコサーミア
 - 6.1 ホメオスタシスの復位
 - 6.2 細胞の自然死の促進
 - 6.3 細胞転移の阻止
 - 6.4 転移がん細胞に作用

2015年春のブダペスト

私とハンガリーとの縁については、私が生まれる10年以上前の東京オリンピックまで遡ります。この半世紀にわたる長い話は、次号執筆の妻純子に譲ることにして、ここでは3月27日から6日間の日程で開催したリスト・フェレンツ音楽大学(リスト音楽院)でのマスタークラスならびにブダペスト滞在中の出来事について書かせていただきます。

昨年に引き続き2回目になるマスタークラスでは、ドラフィー・カールマン(ピアノ科学科長)とレーティ・バラージュの両教授と共に、講師を務めました。前回の受講生には若手の登龍門でもあるピティナ・ピアノコンペティションや東京音楽コンクールのグランプリ受賞者が含まれていたもので、音楽院もハイクラスのマスタークラスとして設定して下さり、両教授によるレッスンも、昨年以上に集中力のある濃密な内容でした。2013年秋にリニューアルオープンしたばかりの音楽院は日本のメディアでも取り上げられることが多く、学生たちの興奮も一入(ひとしお)でした。最終日はリストが実際に生活していた旧リスト音楽院のホールを使わせていただき、受講生8名と講師3名による修了コンサートで閉幕しました。



マスタークラス期間中は、ブダペスト9区のアーダーム・イヌエー音楽学校が練習会場を提供して下さいました。受講生はコンクールシーズンを控えており、私も音楽院でのレッスン日以外は、終日にわたり補講レッスンをしました。高学年の学生のみパール・ダーヴィド氏にも指導してもらいました。彼とは10年前に国際コンクールを勝ち抜いてきた戦友なので、こうして愛弟子を預けられるようになったことは何よりもうれ

しい交歓です。

音楽学校では主に200番教室を使わせていただきましたが、教室といっても200名ほど収容できるコンサートホールなので、3月30日には国際交流コンサートが行われました。9区の公式行事として開催い

しい交歓です。音楽学校では主に200番教室を使わせていただきましたが、教室といっても200名ほど収容できるコンサートホールなので、3月30日には国際交流コンサートが行われました。9区の公式行事として開催い

ただき、地元のメディアも入りました。日本・ハンガリーの生徒はもちろん、先生方も連弾や2台ピアノで熱演。校長を務められているコカシュ・フェレンツ先生はハンガリーで有名な音楽一家で、多大なご理解とご協力をいただきました。

音楽学校への道中、コルヴィンの交差点に建つ工芸博物館が目印になりました。1896年完成で、ハンガリーでも一世を風靡したアールヌーヴォーの名残。西のガ

赤松 林太郎

ウディに対して「東のレヒネル」と呼ばれた作者はペスト生まれ。ハンガリー独特の刺繍をモチーフにした装飾は、ジョルナイ製のセラミックで配され、衝撃的なインパクトを与えています。今なお世紀末と現代が交錯するラビリンスのようなブダペストですが、歩くほどに、なぜこれほど多くの芸術家がこの街を愛したのかが分かるような気がします。

作曲家たちが生きていた当時の楽器をどうしても学生たちに弾かせてあげたいと思い、昨年春のリサイタル以来親しくさせていただいているゴンボシュ・ラースロー館長にお願いして、音楽歴史博物館の楽器を開放してもらいました。小さな教会用のパイプオルガンに始まり、エステルハージ家からハイドンに送られたブロードウッドのフォルテピアノ、リストが弾いたエラル。また、フーバイ邸で若きバルトークをはじめR.シュトラウスやトスカニーニが共演した歴史的なベーゼンドルファーは、第二次世界大戦の空爆にも耐えたハンガリーの近代史そのもの。構造や歴史を学ぶだけでなく、私がレクチャーしながら実演した後、学生たちが実際に音色を確かめて、どう弾いたら歌うように奏でられるのか、それぞれにピアノと対話している様子が印象的でした。

4月2日はドナウ交響楽団との共演でした。ウィーンから運び込まれたSK-6(シゲル・カワイ)の音色が、満席のドナウ宮殿で真珠玉のように冴えました。古代ローマの英雄を描いた「コロラン」序曲が始まった後、ベートーヴェンのピアノ協奏曲第1番と第4番を演奏しました。ベートーヴェンは古典派とロマン派の分岐点に位置します。第1番協奏曲はそれまでの作曲家が完成させた様式を踏襲するだけでなく、実にペー

トーヴェンらしい語法で描かれているドラマです。若さ溢れる作品は大きな愛に包まれており、苦難な人生にあっても感謝や希望を忘れないベートーヴェンの人格が見えてきます。

彼の10年間の熟成が第4番協奏曲で見られます。すでに次の時代を見ているこの協奏曲で、ピアノは夢を語ります。ベートーヴェンは激動の時代を生きましたが、歴史に翻弄されるのではなく、その嵐の中でどのように生きるべきかをはっきり示しました。私はこのコンサートで2曲を演奏できたことに、ピアニストとして誇りに思っています。とりわけ第4番はハンガリーと縁が深かった純子の亡き父が好きだった作品だけに、どうしても彼女にハンガリーで聴かせてあげたいと思い続けてきました。デアーク・アンドラーシュ氏の情熱的なタクトは、私の想いに応えてくれたばかりではなく、音楽家として忠実にスコアと向き合い、あくまでベートーヴェンたらんとしていました。

満場の温かい拍手に包まれた会になりました。後援いただきました駐ハンガリー日本国大使館の小菅淳一大使や国際交流基金ブダペストセンターの副館長をはじめ、ピアノを提供して下さいたカワイ・ヨーロッパとウィーン・スティンゲル社の各社長、そして各企業の関係者各位にご臨席賜りました。ハンガリーだけでなく日本からも多くの友人が駆けつけて、コンサートを祝

福してくれました。練習時間がほとんど取れないスケジュールの中で、コンサートを成功に導いて下さったドナウ交響楽団のマネージャーならびに企画を担当していただいたPropart Hungary Bt.には感謝の念に堪えません。

日本にいる時よりも慌ただしい滞在でしたが、オフ日にはハンガリーの友人たちが集ってくれました。どこのレストランよりも美味しいエディットの手作り料理。そしてレスリング界の英雄コヴァーチ・シャーンドル・パ



ドラフィー教授(右)とレーティ教授(左)

ールの弟にして、ケチケメートの偉大なる詩人コヴァーチ・イシュトヴァーン・ヨーゼフが揃えば、いつものようにパーリンカを飲み交わし、トランシルヴァニアへ想いを馳せて、詩が詠み上げられます。「詩は美しい音楽だ」と彼は言います。純子の父はハンガリーの多くの詩を訳しましたが、中でもイシュトヴァーンの詩訳は本にもなりました。純子がハンガリーのファミリーから「

ラーニャ(娘)」と呼ばれる由縁です。

帰国前日の4月4日は大使館より晩餐のお招きをいただき、大使公邸にてすばらしい交流の時を持ちました。先のロンドン五輪で柔道66キロ級銀メダルを獲得したミクローシュ・ウクバリ選手と、弟アッティラ選手ともご一緒しました。1964年の東京オリンピック以来、ハンガリー柔道界と深く関わってきた純子の父ですが、亡くなっとなお生き続けていることに感慨がありました。公邸に新しく入ったばかりのピアノを弾き初め、ハンガリーゆかりの作品を聴いていただきました。これからも音楽とスポーツの両面で、日本とハンガリーの橋渡しができれば幸いです。

ハイライトで振り返るだけでも50年分の歴史を思い返すようで、今回の一つずつの出来事や邂逅に、多くの人生を重ねて見てきたような気がします。外交官になりたかった夢をピアノに託して、少しず

つではありますが、私にしかできないことを進めていきたいと思っています。絶えず困難はありますが、家族やハンガリーの友人たちの愛に支えられています。今回もプレゼントされた手作りジャムやワインの瓶をいくつも詰めて、長い帰国の途につきま

(あかまつ・りんたろう ピアニスト)

編集部よりのお知らせ



「ドナウの四季」のHPが完成しました。これまで掲載されたすべての原稿を読むことができます。<http://www.danube4seasons.com>

皆様の原稿をお待ちしています。エッセイ、ハンガリー履歴書、自己紹介、サークル紹介などの記事をお寄せください。提出いただいた原稿は、紙面統一の編集のために修正することがあります。修正した原稿は執筆者の校正をお願いしています。

原稿は電子ファイルで、morita.magyar@gmail.comへお送りください。Word文書あるいは一太郎文書をお願いします。EXCEL形式での提出はお控えください。写真および図形は別ファイルで送付ください。

マエストロ・コバヤシから得た感動

栗田 順子

2015年5月14日、42年の人生の中の最も感動的な1日として、語り継ぎたい出来事があった日となった。漢字の違う二人のMORITAさん(ヴェスプリームの森田さんとブダペストの盛田さん)より、最高の贈り物をいただいた。マエストロ・コバヤシ(世界的有名な指揮者であるが故に、あえてカタカナで書かせていただく)のコンサートチケットである。しかも、前から5列目のど真ん中のVIP席。

私たち夫婦は、平日にも関わらず、マエストロ・コバヤシのコンサートのため、自宅より130kmも離れた、ハンガリー王妃ギゼラの街、ヴェスプリームへ足を運んだ。

私は音楽家でも音楽評論家でもない。1人の音楽ファンにすぎない。私がマエストロ・コバヤシのファンになったのは、かれこれ10年前に遡る。リスト音楽院のコンサート会場で、初めてマエストロが指揮するコンサートを鑑賞した時からである。体全体を使った指揮振り、体から溢れ出る力強さ、そして奏者一人一人を敬う謙虚さ。私にとって、交響曲を聴くだけではなく、指揮者のパフォーマンスをも楽しめるコンサートとの初めての出会いで、とても新鮮に感じたのを今でも覚えている。

それ以来、マエストロ・コバヤシが来演するときは、必ず一度はコンサート会場へ足を運ぶようにしている。マエストロが指揮するコンサートは、いつも期待を裏切ることがなく、どんなに遠い席からでも、心を満たしてくれるからだ。

そして、この5月14日のコンサートは、もっと私を虜にってしまうコンサートとなった。

今回のコンサートは、ヴェスプリームのホール、HangVillaで行われた。改築前はとても薄暗い映画館だったが、3年ほど前に、ガラス張りの明るい、カフェのあるおしゃれな建物に改築された。芸術宮殿(MUPA)とは比較にならないほど、小さなホールである。しかし、小さい会場だからこそ、マエストロ・コバヤシが曲を作り上げていく時の集中力、息遣い、迫力が肌で感じられるだ

けでなく、奏者、観客へ心配りがよく伝わってきた。時として、鳥肌が立つことすら覚えたほどだった。

プログラムの第1部は、スメタナ「モルダウの流れ」、「ハンガリー舞曲より4曲」、第2部はドボルザークの交響曲第9番「新世界より」で、どれも馴染みある曲で誰もが楽しめるプログラムだった。

演奏中、ハプニングが生じた。ハンガリー舞曲の演奏最後の締めくくりの直前、楽譜か何かが落ちた。かなり大きな雑音が響き渡った。マエストロが、いつ指揮棒を振り、曲を締めくくるのか。楽団員全員がマエストロの指揮棒に集中する。私は息を止めて、その瞬間を待った。

ところが、マエストロは笑顔すら浮かばせ、その雑音の響きを楽しむかのような表情をしていたのだ。「何が起こるんだろうか」という私の杞憂は一瞬のうちに消えた。指揮棒が振られ、最後の音を響き渡らせ、曲が終わった。雑音を雑音にするのではなく、その音の余韻を利用し、絶妙なタイミングで曲を締めくくったのだ。無駄がなく、絶妙な間を取ったパフォーマンスに、「お見事」としか言いようがなかった。忘れられない、特別な一曲になった。

第1部を聞き終わり、自然と涙が流れてきた。ストーリーのあるミュージカル鑑賞で涙を流したことはあるものの、クラシックコンサートで涙したのは生まれて初めて。少し恥ずかしさを覚え、涙が流れた理由を探し求めてみたい衝動に駆られた。

3人の子を抱えながらフルタイムで仕事をしているので、家事と育児で、目が覚めている時は常にフル回転。きっと疲れているのかもしれない。恥ずかしさを紛らわせるため、そんなことを理由にしたかった。素晴らしい演奏が疲労で枯渇していた私の心の琴線に触れたのかもしれない。感動的な演奏によって、涙とともに日頃の疲労感が消えたことは確かである。

第2部はドボルザークの交響曲第9番「新世界より」。中学の音楽授業では一度は

音楽鑑賞するメジャーな曲である。でも、全曲を生で聴くのは初めて。コバヤシの「新世界より」はとてもドラマチックだった。ドボルザークがどんな気持ちで、どんな情景を思いながら、作曲したのかは知る由もないが、ドラマ性を感じることで、この曲がさらに好きになってしまった。

夏のキャンプでよく歌う、「遠き山に日は落ちて」。オーボエの音色に郷愁にかられ、静岡の緑の山々を思いうかべていた。普段、故郷を恋しいと思うことはめったにない私だが、今回は故郷、静岡を懐かしく思わせるものだった。音楽は、生まれ育った国、民族に関係なく、人々の心に響く、何か共通な要素を持っているものなのかもしれない。

今回、ヴェスプリームのコンサートを企画してくださったMORITAさんが、マエストロの楽屋まで案内してくださった。2時間にも及ぶ演奏でお疲れであるにもかかわらず、マエストロ・コバヤシは、頬を紅潮させ、汗だくの顔をタオルで拭きながら楽屋から出てきてくださった。私は、今日の感動への素直な感謝の気持ちを直接伝させていただくことができた。そして握手をしていただいた。彼の手はとてもやわらかく、温かい手をしていらっしまった。

マエストロの奥様がおっしゃっていた、「今晚の『新世界より』は、チェコフィルに劣ることのない、今までの中でも一番の出来」と。

音楽専門家でもない凡人の私ではあるが、音楽の素晴らしさを感性で受け止めることはできるようになったのかもしれない。それは、コンサートの度に、マエストロ・コバヤシが、私たちに、音楽の素晴らしさを教えてくださっているからである。また、機会があれば、感動を求め、是非、コンサートに足を運びたい。

最後に、漢字の違う二人のMORITAさん、そしてマエストロ・コバヤシ、ジュール交響楽団の皆様、感動的な夕べをありがとうございました！

(くりた・じゅんこ ジャンベーク在住)

マエストロ小林がハンガリー人に愛され続ける理由

桑名 一恵

ハンガリーの国民の多くが、一人の日本人を数か月前から日を数えながら彼の登場を毎回待っています。彼の公演日が近づくにつれて、まだかまだかと指折り数える程、愛おしく思える外国人がいるなんて驚きでしかありません。共演するオーケストラもまた、彼との初リハーサル日に向けて念入りな準備をして待ちわびていて、公演が決まったその日から彼と共演できる事を親戚一同に自慢げに話し、それを聴いた人々もまた、まだ公演があったわけでもないのに、すでに誇りに満ち溢れ食卓はその話題でもちきりになることも多いです。「異常現象」と言っても過言ではない位、外国人でありながら、これ程までに愛され続けている人は他にいないでしょう。

私自身も実生活で国民の反応を体験する事も多く、市場へ買い物に行った時に野菜を売っている男性が「君は日本人かい？知ってる、Kobajasi Kenicsiró(ハンガリー語表記)って。彼が今度ハンガリーにまた来るんだ。嬉しいよね、もうワクワクするよ」と。

もちろん、彼は私のことを知らないし、私が説明する必要もないのですが、音楽関係者として日本人在住者として興味があり、「私は日本人だけど、なぜその名前を知っているの。音楽が好きなんですか」と聞いたところ、「いやいやコンサートに足を向けることはできないけど、僕くらいの年代は、どんな職業の人でも彼のことは知っているし、彼が来るのを楽しみにしている人が多い。ニュースや新聞などで記事が出ると自然と目がそこに行ってしまうくらい身近な存在なんだよ。彼を見ていると熱くなれるし前を向いてもっと明るい人生を送らなきゃって思うんだ。ぼくは彼に何かしようとしても新鮮な野菜しか届けられないけどね(笑)」。

幾度もこのような会話を様々なハンガリー人と交わしてきました。音楽関係だけでなくパン屋さん、自動車の修理屋さん、電車のチケットセンターの方々や国内旅行の最中に出会った人々。どこへ行ってもここハンガリーでは、Kobajasi Kenicsiróという一人の日本人指揮者の名前をフルネームで教えてくれます。ハンガリーの指揮者コンクールで優勝してから40周年という長い月日が経った今日でも、小林 研一郎氏がこの国でKenicsiróと言う愛称で愛され続けている理由を、改めて考えさせられました。

今年のコンサートでは、ある本番のリハーサルを見学させて頂きました。オーケストラの背後から指揮者を正面に見て、じっと座ってマエストロのリハーサルを聴かせて頂くのは初めてです。普段はリハーサル開始直前まで出入りの多いオーケストラメンバーも、全員ステージ上にスタンバイし、個々が念入りにウォーミングアップをして待っていました。いつもよりすでに緊張感が漂い、それだけ共演を待ちわび、今から冒険にでも行くのかという高揚感でステージが高まっていました。指揮者登場の間、団員は待ちわびていた笑顔とこれから始まるドラマへの期待感・そしてマエストロへの敬意を表するかのように拍手喝さいが起こりました。マエストロもそれに対し答えるかのようにハンガリー語で挨拶し、これから本番までの間お互いが共感しあい、良いものを共に作り上げて行きましょうとエールを交わしていたように見えました。

指揮棒が上がると同時にメンバーの目の色、周りの空気も一変し、物語の1ページ目が描かれ始めました。リハーサルが進むにつれて互いの距離感も縮まり、マエストロのタクトとオーケストラのサウンドが混ざり動き始めてストーリー性を増していきま

した。オーケストラが奏でるサウンドを見事に転換させていく指揮や感性に魅了され、その世界に引き寄せられて行きました。

とくに印象に残ったのは、マエストロが時折目を閉じて手を胸に当てて少し顔を上げるとき、楽譜に書かれている音一つ一つの存在そのものに感謝そして祈りを込めているようにも見え、作曲家に対する敬意であると感じましたが、本当に穏やかで優しい表情でした。

優れた指揮者は世界中に多く存在すると思います。小林氏は「炎のコバケン」と評されるように、エネルギッシュでダイナミッ

クな印象が強いのですが、リハーサルを聴かせていただくと、エネルギッシュという印象とは正反対の清らかで優しさを肌で感じ、鳥肌が立つほどの驚きを隠せませんでした。音の方向性やサウンド作りに気を配り、音が消えた後の消音(いわゆる余韻)に至るまで、言葉では表現尽くせない空間づくりの匠とも言えるべき瞬間を感じる事ができる指揮者とは、なかなか出会うことがありません。これこそが本来のマエストロなのではないかと感じ、私にとって更に知りたくなる存在になりました。

本番はどの公演もチケット即完売になるほどの人気ぶりで、各会場は超満員です。ステージに現れた瞬間は大喝采の拍手と指笛や黄色い声援もあちこちで飛び交うくらいの歓迎です。皆さん、この時を待っていたんだと実感できる瞬間です。私はフロア一全体が見渡せる場所から本番を聴いていましたが、観客の皆さんが幸せそうな表情で聴かれているのを観察できました。クラシックコンサートのプログラムは決して軽い音楽ではありませんが、会場は終演まで、家族が故郷に帰ってきたかのような感覚と幸せな時間の共有しているのが分かります。そして、今回はどんなストーリーを披露してくれるのかという期待感で会場全体が盛り上がる様子を肌で感じる事ができます。マエストロ自身も、帰郷したような安心感で、待ちわびてくれていた聴衆に幾度と感謝の意を評しているように感じました。

40年という長い年月で確立してきたマエストロの音楽への情熱と愛情、この国に対する特別な思いと感謝が、40年変わらず、聴衆との関係を繋げているのだと改めて感じました。これから先も、マエストロとハンガリーは、さらに深く長い関係を持ち続けていくことを期待します。私自身もハンガリーの方々と共に存し、よい関係を結んでいけるように精進していきたいと思いま

(くわな・かずえ Propart Hungary Bt.代表)

コバケン「我が祖国」モルダウ

森田 友子

分かっちゃいるけどやめられないもの、それは、馬と花。そして、なぜかクラシックの音楽。

乗馬は、こどもの頃に大好きな祖父が夏休みになると連れて行ってくれた場所だったから好きになり、馬大国ハンガリーに来てしまったからは、もうやめられるわけがない。才能がない(花がすぐ枯れる)と分かっただけでも続いている庭作りは、植物が専門だった父親の影響。実家の花はいつも綺麗だった。(ちなみに料理好きな母の遺伝子も私には受け継がれなかった…)でも、クラシックは、どうしてこんなに惹かれるのか、これまで謎だった。

高校生の頃、クラシックばかり聴いていたので、たまには流行の曲でもと、友人が様々なジャンルの曲をカセットに録音して渡してくれたことがあった。いい音楽ばかりだったけれど、その後もあまり関心が向かなかった。

大学生の頃にヨーロッパを一人旅した時、たまたま訪れたギリシャのコルフ島のホテルの朝食で、ご主人が音楽と医学の関係を研究されているアメリカ人夫婦と同席した。当地で参加しているシンポジウムに招待して下さり、そこで初めて「音楽療法」というものを知ることとなった。それからそれが特に自分の人生にどうこう影響することはなかったが、その時味わった不思議な感覚は今でもよく覚えている。

そして、数年前、リスト音楽院マスターコースの通訳をする機会があった。6日間丸一日ピアノの隣に座っているのは、さぞかし疲れるだろうと思っていたら、まったく逆で、音楽の横で過ごす一日は集中力が増し、仕事後は毎日さっぱりして帰宅した。

ここにきてついに、クラシック音楽の威力をはっきりと身をもって体験することとなった。それは、5月14日にヴェスプレームで開催された小林研一郎コンサートでのこと。音楽は心を撫でてくれる、そう感じる時間だった。今年の冬は根底から揺すぶられるくらいの事件が続いていたので、音楽の

癒しが怒涛のように心に流れたのだった。

クラシックは、癒しの効果と同時に考える題材もくれる。映画や演劇、本や詩(特にハンガリーの詩)ほどに心をえぐられることはないが、心に容赦なく沁みてくるので自分の心底にあるものを無視することができない。人間の仕組みはおもしろいなと思う。それから、曲の意味を自分の人生と勝手に重ねて考える、つまり自己流解釈も、素人だからできること。

今回のコンサートの中で私には、スメタナ「我が祖国」の第二曲「モルダウ」が最高だった。コンサート前の数日はほとんど毎日聴いていて、今でもあまりに頻繁に聞けるからか、先日9歳の息子がPeonza(大流行しているメキシコのコマ)を回しながら口ずさんでいるので笑ってしまった。

曲は、後半「St.Johann-Stromschnellen(聖ヨハネの急流)」の節から、大変に苦しかった今年の冬が重なる。大晦日からキツネの襲来(我が家では鶏を飼っている)、新年明けで早々に車の凍結路面スリップ事故と災難が続き、ようやくBal(舞踏会)やFarsang(謝肉祭)で気分転換できると思っていたらインフルエンザウィルスが一家を襲撃。そして、心身ともに打ちのめされているところに、1月で12歳を迎えた娘のKamasz(第二次自立期)が勃発して、3月末くらいまではボロボロになっている自分をただただ憐れんでいるだけの毎日だった。ヨーロッパ生活もいよいよ15年目に突入するということに、この冬はもう乗り越えられないんじゃないかとまで思ってしまう弱気な自分が情けなかった。

それでも季節は巡ってくる!!!「Die Moldau stroemt breit dahin」(モルダウの流れ)、長調。好転し始めたのは、Medvehagyma(ラムソン)が森に出始めた頃。自然の旬の効力は凄い。疲れた体を少し整えてくれた。

そして、最後の節「Vysehrad Motiv」(ヴェイシェブラドのテーマ)。マエストロのコンサートが絶妙のタイミングで到来し、全て

を払拭してくれた。こうして私の悪夢のような半年も締めくくられた。

さて、この日の会場は、Hangvilla。こけら落とし前から建築物として脚光を浴びていた、第二の我が祖国ヴェスプレームの最新の劇場。建築家グループはいつくかの有名な賞を受賞している。アットホームな規模(500人収容可能)のホールは、音響にかなりこだわって作られ、年間プログラムには著名な演奏家が目白押し。この日は、ブダペストの友人夫妻、地元の女友達二人と友人夫妻を招待して赴いた。

当日は、ブダペストからの友人夫妻と夕食を済ませてから出かける予定だったが、到着がギリギリになってしまったので、炭酸水で乾杯して盛り上がり、時間ピッタリに会場へ向かった。用意しておいた主人の仕留めたイノシシ&キノコのバコニ風の料理を堪能して頂けなかったのだけが惜まれる。

それからの約2時間は夢のような時間だった。ブダペストからの友人は感動して涙を流していた。製薬ラボの化学者の友人からは、眠れないくらい感動したという感想が、工芸家(ヘレンドの陶磁器デザイナー)の友人からは、数日後、特別に素晴らしいコンサートだったというメッセージが入った。時期によっては毎週のように劇場へ足を延ばしている彼からの評価は信用できると思う。兎にも角にも、みんながそれぞれに満足して癒されて帰路に就いたということだ。

余談であるが、この夜、マエストロはブダペストへ戻らなければならないということだったので、差し入れをする機会まで得られた。こどもたちは、おにぎりを握る私を見て興奮していた。昔、王様に食事を作るのは大変名誉な仕事だったのだから、と。こうして、いろいろなことが詰められていた今回のプログラムは、多くの軌跡を残して高らかに流れていった。

(もりた・ともこ ヴェスプレーム在住)

我が子はオヴォダツ子

吉田 恵子

うだ。我が子達は1年目にライオンとクマ、2年目に白ネコとピンクネコの仮装をした。クラスの子達もかなり凝った仮装をしてくる。衣装や小道具の準備が大変だが、嬉しそうに子供達を見ていると、準備の疲れも何もかも吹っ飛んでしまうから不思議だ。

面白いこともたくさんある幼稚園だが、長男がなかなか馴染めず幼稚園の先生方や周りの方々に迷惑をお掛けした。長男は初めてのことやお友達に対して、自分から積極的に動いていけず、慣れるまでに時



間のかかる子だ。加えて来洪する前の1年間、日本の幼稚園に通っていたので、先生やお友だちと会話でやり取りしながら生活する楽しさを知っている。その分、言葉の壁が彼には高く高く感じられたのであろう。この頃のことを思い返すと、日本語しか話せずヒステリックになっている子を相手に、一生懸命関わろうとしてくださった先生方には感謝の思いでいっぱいである。と同時に、親としてもっと長男に何かできたのではないかという思いで胸が痛くなる。そんな長男も今は、日本人学校の2年生。毎日汗臭くなって帰ってくるので、充実した学校生活を送れているようだ。来洪時より身長が15センチも伸び、じわりじわりと私の身長に迫ってくるようになった。身長だけでなく体重も順調すぎる勢いで増えており、本人にとっても親にとっても悩みの種である。

一方、長女はこちらに来た当初は泣き虫になってしまった。泣く度に先生にギョッとしてもらい、私に慰められ、夫に叱咤される毎日。でも気が付けば、いつの間にやら泣くことも少なくなり、園での話の中でハンガリー人のお友達の名前も出てくるようになった。挨拶や簡単なハンガリー語を覚え、彼女なりに園生活を楽しんでいるようである。知らない人にも積極的に挨拶をしているので、彼女をきっかけにたまたま居合わせたハンガリーの方達と話をする嬉しい機会にも恵まれる。昨年9月からは次女も同じクラスに入園したこともあり、ますます「私はおねえさん」という思いが強くなってきているようである。

末っ子の次女は、私が目を離しがちなこともあるのだが、大人がびっくりすることをやる子だ。体や壁、ソファに落書きをするのはまだ序の口、おしゃれのつもりで自分の前髪や眉毛をはさみで切ったり、歯磨き粉を体に塗り

たくったり。その時は大変だったが、今になってみれば笑い話になっている。また、こちらに来た当初は会話もままならない赤ちゃんだったのが、近頃では私のミスを指摘するようになり、一丁前取りである。園に通うようになって1年、帰宅してから園での出来事を嬉々として報告してくれる姿に毎日ほっこりさせられている。

ハンガリーでの生活をスタートさせて2年半、たくさんの方々に支えられ、様々な経験を経て子供達も大きくなっている。こちらの幼稚園生活の中で得た嬉しかった思い、楽しかった思い、苦しかった思い、辛かった思いは今後の子供達の人生においても有意義な思い出になっていくに違いない。

(よしだ・けいこ ブダペスト在住)

ある都市と夢

ついにこの痛い日差しの季節がきた。3年前の夏、初めてブダペストに単身訪れたときのことを思い出す。

なぜ、この街が、国がこれほどに僕の心を射止めたのか。不思議と当時感じたはずの強烈な印象はあまり思い出せない。ただ、人生で初めて「ここに住みたい!」と動悸を感じたのがこのハンガリー、そしてブダペストだった。きっと、この街をとても「人間くさく」感じたのだと思う。いまそう断言できるのはもちろん、ここに住み始めて10ヶ月が経とうしている今こうして原稿に向かって思い出しているからに他ならないけども。

3年前、シベリア鉄道の旅を経て、いわゆる「東欧」を見る旅の途中でブダペストを訪ねた。その足でアメリカへ渡り、1年を過ごした。その年の冬休みは単身で1ヶ月、キューバを旅した。なぜ旅をしたか。単に傷心旅行だったとも言える。しかし、その意味と理由をいま改めて考えてみると、日本で概して「社会主義社会」と言われた国々を自分の目で見て歩きたかった。それまでずっと、「社会主義社会」とか「旧東欧」だと、日本で何の不都合もなく使われている一般名詞に押し込められた何かを違和感として感じていた。でもそれが何かわからなくて、自分なりに何か新しいものを、人を、社会の在り方を、そして歴史を見て感じてみたいと思った。それ以降、自分と違うけども似てるもの、似てるけども違うものについて考えることが習慣になり、自分が感じた違和感や感動を日記に書くだけでなく写真に撮るようになった。アメリカ留学から帰国して去年の3月に国際基督教大学(ICU)を卒業、東京外国語大学大学院への進学と休学を経て、いまは中央ヨーロッパ大学(CEU)の修士課程に在籍している。趣味は写真と映画、読書は片手間。専攻はナショナリズム研究とユダヤ史、ということになっている。

この季節になると嬉しいのは光がよいことで、ニコンFに白黒フィルムを携えて歩くのが楽しい。3年前の夏以来、誰かに説明しようとしてどうしても説明しきれない、自分なりに感じているこの街の「人間くささ」を、写真という眼に訴えかける形でどうかおさめたくて歩き回る。この、「人間くさ



Faces of the City (ドナウ河と花火を待つ人びと)

さ」は南塚信吾氏の書く「都市の夢」にも関連があるかもしれない。南塚氏によれば、ブダペストは二つの「夢」を生きる都市だ。つまり「ドナウの真珠」とも評される独特な個性を遺憾なく発揮したいという「夢」、そしてブダペストを「よそ者の都市」から「自分たちの都市」へと戻したいという「夢」、この二つの「夢」がブダペストの歴史には見られると氏は語る。しかし同時に、南塚氏はいわゆるブダペスト史を単なる「ハンガリー人の首都」の歴史ではなくて、周辺一帯を含む「ドナウ川流域の一都市」の歴史的経験の中にこそ捉え直そうとする。一民族・国家の首都でなくて、他民族・広地域の一都市としてのブダペストを考えることは「よそ者の都市」をどうか自分たちのものに取り戻したいという元来の夢をより鮮明にさせる。

いま現在ハンガリーでおこっている移民問題も、ブダペストという都市が歴史的にずっと抱えている夢の、社会的な現れ方の一形態なのかもしれない。そんな勝手な想

色平 卓郎

像も許されるだろうか。すくなくともこの都市の夢は、その歴史だけでなくこの都市の見栄えにも振る舞いも、人の住み方や在り方にも関わっている。僕はそれを、南塚氏の本を読む前から、3年前の夏に初めてここに来たときから、なんとなく言葉にできない形ではあるけども感じていたのだと思う。そしてここに住んではや10ヶ月、僕はこの、夢に生きて、夢のために在る都市をいつのまにか「人間くさい」と呼ぶようになった。僕なりに、自民族の誇りと顕示欲とがふたつの夢を彩ってひとつの都市を形づけている様を表した結果が「人間くさい」という形容詞だった。そして「よそ者の都市」としてのブダペストを僕は、ナショナリズム研究、そしてユダヤ史の学びの中にこそ見いだそうと思った。だから僕はその希望を叶えてくれる中央ヨーロッパ大学

(CEU)への進学を決めた。

僕がいま学ぶ中央ヨーロッパ大学(CEU)では英語で全ての用事が済む。しかし、実質的な第二公用語はセルボ・クロアチア語だ。先述の通り、専攻としてナショナリズム研究とユダヤ史を学びながら、僕は3年前に自分の感じたブダペストを模索している。同じように、CEUで毎日の生活をしながら、ハンガリー周辺からここに学びにきた「よそ者」と呼ばれてしまうかもしれない人達から多くのことを学んでいる。僕ら「よそ者」がブダペストで一緒に同じ夢の空気を吸って、それに対して文句を言ったり意見を言ったり、そしてお互いの国や文化、社会のことを話し合うことから多くを学び感じ取っている。同じ場所に留まりながらも擬似的に旅をしているようで、お互いの似たところを感じつつそれでも違うと感じ、違うと感じつつもやはり似ているようにも感じる。その繰り返し。それを自分と相手との応酬の中でだけでなく、友人同士の間で議論や、時には喧嘩やジョークが繰り返

げられているのを見ていると、日本とアメリカだけで時間を過ごしてきた自分がいままで経験したことのない何かがここに今起きているのだと感じられてならない。CEUは僕にとって、単に机上の勉強だけの場所ではなくて、お酒を飲みながらひたすら語り合う空間であり特権だ。その大学は僕が一目惚れした夢の都市、あるいは「よそ者」の街であるブダペストのど真ん中にキャンパスを置いている。

ときどき、この英語中心の環境に身を置きながら、これで果たしてハンガリーがわかるのかと自分でも疑問に思うことがある。ハンガリー語の学習は進まず、学期中は学務に追われて外に出る時間もない。いわば、「よそ者」としての風当たりをほとんど受けないままに過ごせてしまう、それもまたCEUでの生活だ。そんな僕でも、写真は外に晒し出してくれる。外に出て、自分をその街の空気や風景に晒し出さなければ、僕が撮りたいと思った写真は撮れない。自分が感じているもの、違和感、感情など、それを写真の中に表現するのは難しい。でも、自分をその「人間くさい」環境に、または夢の中に置きながら、撮り続けなければいけないのだと思っている。僕にとって写真とは、人とのコミュニケーションのみならず、その場所の空気や歴史、人の生活の在り方と交流するツールだから。このブダペストには様々な人が行き交っている。中欧地域のど真ん中に位置して様々な「よそ者」たちの行き交う空間であり、それが常にその風景の中で特殊な意味を含んでいる。

日本では、僕がいま在籍している大学のことを説明することがとても難しい。中欧を大学名に謳いつつも、しかし大学は「いわゆる東欧」にある。ハンガリーは果たして東欧なのか中欧なのか、それをまず説明しなければならぬ難しさ。そして説明しようとした途端に自分の知識や考えの狭さに気づく。しかし僕はCEUに身を置くものとして、ここに来るまで漠然と「東欧」という言

葉を無批判に使ってしまっていた学生としてこの問題を考えなければいけない。特にナショナリズムと歴史を学ぶ一学徒として。大学名だけではない。日々の生活の中でも同じように、バルカン半島やルーマニア、ブルガリア、グルジア、アルメニア等、「いわゆる東欧」にくられてしまっている国からきた友人たちから多くを聞き、考えたい。おそらく、僕がCEUで得た財産として最大のものはこれら友人であり、更には、こういう風



Cultural Heritage (King, Priests, and Soldiers (8月20日、聖王の右手の風景))

に考え行動できるようになった感受性なのだと思う。そしてこの大学には、この感受性をより磨き、問い直し、チャレンジすることのできる環境が整っている。専門分野の全く異なる友人たちと、同じ空間と時間を共有し、話し合い、向かい合う環境がここにはある。僕はそれが好きだ。お互いが違って、それでも似ていて、それでも違う。ほんとうに「人間くさい」、そして人間味に溢れた環境だと思う。だから僕は、いまCEUで学び、ブダペストに生活していることをとても嬉しく、誇りにも思っている。

ただ、良い事尽くしのようなCEUでの勉強、そしてブダペストでの生活だが、最後にいくつかアンビバレントな点もあげたいと思う。特に2点。第一に大学そのものの傾向としてのヨーロッパ中心主義、これはやはり否みがたい。特にナショナリズムの問題を扱うべき授業のなかではそれが顕著だ。アジアのみならず南アメリカ地域やオセアニア地域への関心も薄い。それが残念で

ならない。第二点目は良いことの裏返しだけれども、学生生活が充実し過ぎていてその居心地の良さからなかなか外に出て行けないことだ。CEUの多くの学生は学費を全額免除され、寮での生活と月々のお小遣いをもらっている。それだけ勉強しろということなのだが、おかげで多くの学生がハンガリー語はおろか、歴史や文化もあまり学ぶことなく、ただ単に学位だけとって卒業していく。僕自身、反省すべき一人にならぬ

ように心がけながらも、なかなかうまくいかない。CEUという特殊な環境にいて、それを取り巻く大きな社会に無関心でいられてしまうのも、他ならぬ事実だ。それは僕の母校である国際基督教大学(ICU)が、Isolated Crazy Utopiaと揶揄されていたのと似たような境遇であるような気がする。僕はこのブダペストにあるCEUという大学で学ぶ意義をしっかりと考えてみたい。ICUでは東京にあるICUという大学での意味を考えることはなかった。

東京は僕にとっていまブダペストがそうであるような街にはならなかった。しかしいま僕はこうして夢の街に住んでいる。

僕がこの夢の街に住んで、まだ夢を見ていられるのもあと1年。その後何をしたいか、それもまだ夢の中でだけ考えることにしている。僕がヨーロッパを真剣に考えるようになったきっかけは森有正、加藤周一、そして竹内好といった人達の著作を通してだった。僕は僕なりに、ここブダペストにいて自分なりにヨーロッパ・アジアについて考えていきたい。あと1年、修士論文を書かなければいけない手前多忙を極めるけども、自分なりに写真と思索、読書に取り組んでいきたいと思う。そうしていけばそのうち自分の夢も将来も見えてくるだろう、そう信じている。

(いろひら・たくろう

Central European University)

高校生達を一つにする 日本語コンテスト

Németh Nikolett

セント・ラースローというブダペストの高校で日本語サークルの講師として働いて3年になります。学習者は約20名で、私は彼らを教えるのが本当に大好きです。そこでは3つのグループがあって、それぞれレベルが違います。私はちょっとシャイですから、最初は人前で大きい声で話したり説明したりするのがすごく難しかったです。生徒たちが私に対してハンガリー語の敬語を使うのも本当に変な感じがしました。また、私が「座ってもいい」と言うまで生徒達が立って待っていることにも、なかなか慣れることができませんでした。でも今は「私は先生だ」ということにだいたい慣れてきました。

現在、週3回高校に通い、日本語に興味がある生徒達を教えることができ、なによりもありがたいと思っています。また、自分でも、「卒業したばかりの学生」から、「責任感の強い大人」になってきたと思います。教え方も上達してきました。

私の教え方には二つの特徴があります。一つ目は、生徒との距離を縮めることです。距離を縮めるといっても、教師として尊敬されなくてもいいわけではありません。私はいつも尊敬され、好まれる先生になりたいと思っています。もう一つの特徴は面白い文を作ることです。生徒達の性格によって練習の仕方を変えます。たとえば、誰かが動物が好きだったら、練習している時たいい動物に関する文を翻訳させます。バットマンやスーパーマン、あかい犬、ピンクのスカートをはいている男の人などについての文を作ったこともあります。なぜかと言うと、文が面白ければ面白いほど生徒達は簡単に覚えられますから。

三つのクラスは1年間別々なので、同じレベルのクラスメートにしか会えず、日本語を勉強している生徒達はお互いを知りません。だから私はできるだけ皆と一緒に過ごす時間を作りたいとも思っています。たとえば日本語サークルでクリスマスパーティーやカラオケを行っていますが、1年中何よりも楽しみにされているのは、学期の終わりに行われている日本語コンテストです。三つのグループの全員を二つに分けて、二つのグループを作ります。グループはリーダーを選んで、出てくる問題を協力して解きます。このプログラムは今年が3回目、高校の慣習になりつつあります。出る問題は全部日本に関するものですから、楽しみながら日本の文化や宗教などについて勉強できるいい機会です。

最初の問題はいつもクリエイティブな問題です。昨年、各グループは「さむらい」、「うきよえ」などそれぞれのトピックをもらって、そ

れについて何とかして全員でおもしろい発表をしなければなりません。今年の最初の問題では、Japan regék és mondákという日本の伝説がたくさん書かれている本から、各グループが一つずつ伝説を選んで演じました。

第二の問題は日本文化クイズでした。毎年私は生徒達に本や大学生のレポートを読ませて準備させ、コンテストで楽しいクイズをします。今年のトピックは日本の美術や、外国における日本のアニメの影響、神道と仏教でした。それで高校生達は日本のいろいろな事柄を楽しく勉強できました。

次に日本文化のクロスワードがあって、その後一番楽しいアクティビティというゲームが続きました。ただのアクティビティではありません。タスクは全部日本のトピックで書かれました。たとえば絵を描くタスクとして「ドラゴンボール」や「女子高生の制服」、ジェスチャーのタスクとして「日本への航空券」や「僧侶」などがありました。このゲームでたくさん笑って本当に楽しい時間を過ごしました。

最後の問題は折り紙でした。なぜ折り紙が最後かという、このゲームでは決められた時間内にたくさん作ることができたグループが勝つので、最後まで順位が変わる可能性があるからです。

面白いことに、今年は二つのグループの中で日本語学習歴が短い人が多くいるグループが、日本語学習歴が長い人が多くいるグループに対して勝ちました。とても驚きました。

最後に、生徒は全員、プレゼントをもらいました。私にとっては、プレゼントを探すこともわくわくする時間です。色々なお店に行つて、アジア的なものを探しました。子ども達は日本が大好きですからどんなものでも喜びますが、私の目的は出来るだけかわいらしくて役に立つものをあげることです。去年は漆塗製はしと、日本的な磁器のスプーン、今年は木でできた万年暦をあげました。コンテストが終わっても、皆は家に帰りがりませんでした。教室に留まってレモネードを飲みながら1年の思い出についてしゃべりました。このプログラムについて「楽しいだけではなく、色々な新しい情報を学べるいい機会だ」と言っていました。午後5時ごろ、ようやく全員が家に帰って、夏休みが始まりました。

このコンテストはすごく楽しくて人を笑顔にするプログラムです。日本語がわからなくても問題ができますから、日本語学習歴に関係なく一生懸命頑張りがりながら、団体精神を強くすることができます。私は1年中このプログラムを楽しみにしています。計画するのは大変ですが、高校生達の笑顔と楽しんでいる様子を見ると、「ああ、頑張ったかいがあった」と思います。この高校の教師になって、真面目なすばらしい生徒達に出会えて、本当に嬉しです。

(ネーメット・ニコレッタ)

大学生活の思い出

Révai Nándor

私は2011年にエルテ大学に入学しました。大学に受け入れられたとき、私は非常に幸せでした。「興味がある分野についてよく勉強することができる」と思いました。新入生のために大学生生活開始前に開かれる合宿(ハンガリー語でゴーヤターボール)にももちろん行きました。ゴーヤターボールはすばらしい経験でした。そこで多くの学生に会って、様々な先生についての噂を聞きました。私は特にアジア関係の学科の学生たちと友達になりました。ゴーヤターボールのおかげで同級生と知りあえたので、大学最初のクラスに行くことも楽しみにになりました。

授業登録の時、先輩たちはあらゆることを手伝ってくれました。登録の後で先輩たちは1年生を飲み会に招待してくれました。その時、私たちはまだ授業や先生についてあまり知りませんでした。先輩たちがいろいろな便利な情報を共有してくれました。先輩たちに会えたことがうれしかったです。

日本学科の先生たちの紹介は大学のI棟の地下にある教室で行われました。1年生たちを応援するスピーチをした先生もいました。「大学は語学学校じゃない」と言った先生もいました。その先生は、「アニメや漫画レベルの日本語を勉強したいだけなら、大学じゃなくて語学学校に行ったほうがいい」と言いました。その時少し心配したことを覚えています。日本語を教える先生達にも初めて会いました。私たちは授業を楽しみにしていました。

私は大学に入る前に日本語を勉強したことが全然ありませんでしたから、最初は大変難しかったです。ひらがなとカタカナを覚えることは難しくありませんでしたが、それを使うことは大変でした。テストをやる時いつも「こんなに短い時間でテストを終えるなんて不可能だ」と思いました。私はいつもテストを時間内に終わることができませんでした。

クラスの多くの学生が大学に来る前に日本語を少しでも勉強したことがあったので、私はちょっと自分をばかだと感じました。1年生の1学期は合格できましたが、2学期はだめでした。しかし、やめたくありませんでした。なぜ続けたのか。それはおそらくコミュニティのおかげです。1学期の終わりまでには多くの人々と良い関係ができていて、他の学生たちが私にやる気を起こさせてくれました。落ちた試験を1年後にもう一回受けなければなりませんでしたが、私にとってそれは有益なことでした。なぜなら1年間本気で漢字と語彙を暗記し、文法を練習したからです。おかげで2回目は進級で

きました。2年生から新しいクラスメイトと一緒に勉強することになりましたが、彼らともすぐに友達になりました。

授業以外での思い出は例えば、クラスの後で大学内にあるパブに行ったことです。そこに行くと、いつも誰か知っている人がいました。誰かと座って、ビールを飲みながら話し始めて、気がついたらすでに深夜だったということが何度もありました。他の専門を持つ学生と話すことはいつも面白かったです。私はしばしば日本語について聞かれました。

1年生の時、先輩に学生自治会の役員になるよう頼まれました。高校ではこの種のことをしたことがなくて、経験してみたかったので、引き受けました。様々なイベントを運営しました。特に今年は私が東アジア関係の学科の合宿の運営責任者だったので、誇り高かったです。また、活動しながら、新入生が大学生活に順応できるようにしてやりたいと思いました。学生が先生や試験や成績などの問題を抱えているならば、我々に連絡することができます。私はこの仕事をやってとても勉強になりました。イベント運営や、お金の管理、人々とのコミュニケーションなどの経験は、就職するときにも役に立つと思います。こういった経験は時として勉強より重要です。

卒業論文は書道と禅の関係、そして禅と中国の哲学がどのようにならに書法に影響したかについて書きました。書道は私が1年生のときからの趣味です。大学の書道クラブで始めました。2年生のときには書道クラブの責任者にもなったので、書道を論文のトピックに選ぶことは私にとって自然なことでした。しかも、副専攻が「東アジア文化」だったので、国際的な文化交流についても書くことができました。

日本語も上達したと感じています。日本語の本を読んで多くのことを理解できるようになりました。しかし、私にとってまだ口頭の日本語を理解するのは難しいです。日本語を話す機会が少ないので、話さなければならぬとき、緊張します。もっと上手になりたいです。大学を卒業しても、私は日本語を忘れません。近い将来、日本に行きたいです。今年、コルヴィヌス大学の経済学部に入学を申し込みました。難しいかもしれませんが、日本語のほかに経済学も勉強すれば、この先の人生で利益をもたらすだろうと思います。

この4年間を振り返って、この大学に来たことが良い決定であったと感じます。きっと将来、よい思い出となることでしょう。終わってみると短い大学生活でしたが、多くの人と出会い、様々なことを学びました。4年間の大学生活で、難しいクラスも簡単なクラスもありましたが、すべてのクラスが私に何かを与えてくれたと感じています。私は全ての先生方に感謝の気持ちでいっぱいです。近い将来、習った日本語を活用できたらいいと思っています。

(レーヴァイ・ナンドル)

オリンピックに向けて

私は今、ハンガリーでプロ選手としてハンドボールをしています。ハンドボールを始めて今年で18年目になりました。なぜハンドボールを始めたかという、私の小学校は京都府の京田辺市というところがあり、京都国体が行われて以来、毎年、小学校の全国大会がこの京田辺市で開催されていて、この市の9つあるすべての小学校がハンドボールチームを持っていて、ハンドボールというスポーツがとても盛んな地域だったからです。中学時代を除き、全国大会の決勝の舞台を経験させて頂き、指導者にも恵まれた環境の中でハンドボールをしていくことができました。そのおかげで今の自分がありますし、恩師には本当に感謝しています。

私がジュニアプレイヤーの時(U20)、初めてハンガリーを訪れました。大会前のトレーニングマッチを、ハンガリーの同じジュニアチームで行いました。その時のチームが、今私が所属しているFehérvár KCのジュニアチームです。海外でプレーすることは、その頃考えてもいませんでしたが、ハンガリーで試合を行い、このチームに声をかけて頂いて、初めて「海外」という場所を視野に入れるようになりました。その時、私はまだ、大学在学中だったので、ハンガリー行きを諦め、そのまま日本でプレーすることを選びました。大学を卒業し、実業団で2年間プレーし、その後にここハンガリーに来てちょうど1年が経ちました。初めて「海外」という場所でプレーすることを考えた時は、「本場のヨーロッパでプレーしてみたい」、「自分のプレーがどれだけ通用するか試してみたい」という気持ちだったのですが、今では、「オリンピックに出るために自分を高めたい」、「プロとしてハンドボールをしたい」、「ヨーロッパのプレーをもっと学びたい」という考えに変わりました。

ハンドボールはヨーロッパ発祥のスポーツで、今もヨーロッパが本場として行われているスポーツです。ヨーロッパの選手は、

体格も大きく、日本では大きい方の私でも、こちらの選手と並ぶと小さく感じます。それくらい体格差はありますし、パワーも違います。私達日本人には何が足りないのか、必要なものは何か考え、実際に肌で感じながら日々トレーニングしています。日本のハンドボール界は、男子は1988年のソウルオリンピック以来、女子は1976年のモントリオールオリンピック以来、オリンピック



に出場していません。ですから、何としてみてもオリンピックへの切符を取り、オリンピックに出場したいし、それによって日本にもっとハンドボールを広められたらと考えています。

私が今所属しているFehérvár KCは、ハンガリーの中西部に位置するSzékesfehérvárという町にあり、ハンガリーの歴代国王が戴冠・埋葬された都市として知られています。チームは、ハンガリーの1部リーグで昨シーズンは12チーム中、6位という結果でした。ハンガリーのリーグはヨーロッパの中でも高いレベルではありますが、チームが目標としていた4位以内には届かなかったため、来シーズンはもう一度、この目標に向かってチャレンジしていきたいと思えます。1年間、ハンガリーでプレーしてみて、やっとヨーロッパでプレーする夢が叶った喜びと同時に、全く違う環境の中での生活、プレーすることの大変さを学びました。私が、海外で生活、プレーするにあたって大切だと思ったことは、どんな些細なことでも言葉にして伝える、ということです。

エッセイ

田邊 夕貴

ただでさえ違う環境に育ってきた同士なので、コミュニケーションは欠かせません。言葉を話せない、通じない、理解できないことは、私にとってすごくストレスとなりました。こちらの人は、自分がこうだと決めたことは、周りに関係なくそれを貫き通します。私が意見を言う前に向こうの意見を通されたり、私が何か言っても向こうの意見を優先されたりというのがよくありました。

人の意見を聞き入れないといけない時もあるのではと思うところでもありますが、逆に考えるとこれがこちらの人の良い部分でもあるし、日本人の良さを出しながらも見習いたい部分でもあります。人に何を言われても自分の意見を曲げない、それくらい強い意志を持っています。たとえその相手が監督であっても同様です。日本ではあまり考えられないことではありますが、プレー中に監督に何

か指摘されて、それが自分の考えと違った時は、監督にも意見します。私もそれくらいの気持ちを持ってやらないといけないし、私に足りない部分を成長させてくれる良い環境だと思っています。

海外での生活になかなか慣れない、そんな時の支えとなったのが、こちらで出会った日本人の方々、家族、そして今のチームメイトであり、同じ日本のナショナルプレイヤーでもある先輩の存在でした。日本ではライバルチームとして戦ってきましたが、今となっては良き仲間であり、尊敬する先輩です。今年はオリンピック予選の年。10月に名古屋で開催されます。先輩とともに、ここハンガリーで自分を高め、予選までに最高の準備をしていきたいです。人との出会いに感謝し、これからもハンドボールを通して多くのことを学びつつ、日本にハンドボールを広めるきっかけになればなと思っています。

(たなべ・ゆき Fehérvár KC所属)

留学生自己紹介

「四分の一」の喜び

リスト音楽院大学院ヴァイオリン科

花岡 沙季

私の2年の留学生活は、あと半月ほどで幕を閉じます。日本に帰りたくなったり、こちらの友達に悲しいことを言われて傷ついたり、レッスンで上手くいかず悔しい思いをしたり、何度も家でポロポロと泣いた日がありました。留学生活の四分の三は辛く、四分の一は嬉しかったように思います。でも、辛いことがあったお陰で、残りの四分の一の喜びは特別に輝いています

私は高校生の頃から留学に興味があり、語学教室に通っていましたが、留学先はきまりませんでした。同じ敷地に7年以上も通いたくないという理由で、大学院に進むことも考えられずにいました。ところが、大学4年になって、ペレーニ・エステル先生が1年間客員教授で来日されました。1年間だけ日本にいながら留学する感覚で先生に付く予定が、先生の人柄、演奏に惚れ込み、出会ってほんの2か月後に、「先生の許でもっと勉強したいので、来年リスト音楽院のマスターを受けます」と言うほどまでに、先生に思い入れしました。レッスンを受けて間もない私に、先生は、「いらっしゃい！」と快く迎え入れて下さり、語学教室も辞め、あれよあれよという間にハンガリー留学が決まりました。

夢と希望を抱いてハンガリーに来た私ですが、学校が始まってすぐに毎日オーケストラの授業があり、ハンガリー語も分からず、どこから弾くのかも分からない、誰も助けてくれない、そんな日々ストレスを感じるばかりでした。その頃書いていた日記を読み返すと、紙いっぱい赤の色鉛筆でぐちゃぐちゃなページが続いていた程、憧れの留学生活とは真逆な毎日に、悔しさと焦りでいっぱいでした。

ハンガリー語の語学学校に通い、日本人と外国人とを問わず、いろいろの人に積極的に話しかけたことで少しずつ友達が増

え、私の周りには素敵な友達が沢山できていました。王宮で演奏をした時に譜面台を忘れた私に、「私の譜面台を使って！私は椅子を使うから！」と言って自分の譜面台を私に貸してくれた友人。「お礼に何かさせて！」と言うと、「気にしないで！私もよく忘れるから！」と言ってくれた時には、本当に嬉しく思いました。また、私の先生や伴奏助手のマリアンナは、時には厳しく、時にはまるでハンガリーの母や姉の様に接してくれました。5月のディプロマコンサートでは、最後のレッスンまでほぼ1ヶ月間、レッスンの度に叱咤されていましたが、コンサート当日は開演直前から休憩時間、さらには終演後に誰よりも早く駆け付けてくれ、沢山のハグとキスをくれました。もちろん日、本人の素敵な友達もできました。同期生とはお誕生日に合わせて同期会を開き、誰かの家で和食や中華を作り、夜の公園でバレーボールをしたり、朝までトランプをしたり、それぞれの留学生活で起きた辛い事や楽しい事を話したりと、同期会はいつも私の良いリフレッシュになりました。

CDや本などで名前を見たことがある素晴らしい先生方から指導を受けられ、その先生方からハンガリーの作曲家たちの裏話や彼らの日常話を聞いたこと、その先生方と共に演奏できたこと、地方公演含め月に何度も沢山のコンサートに出演できたこと、ハンガリー独特の拍手が分かったこと、日本では信じられない程安い値段で沢山のオペラやバレエを見られたこと、日本では出会えなかったであろう職業の方達と出会えたこと、ヨーロッパ各国を旅行できたことなど、留学の成果は数えきれません。

大学3年生の時に、室内楽でコダーイのテルツェット(三重奏)を勉強した折、先生から「コダーイはハンガリー人だから、もっと土臭く弾かなくてはいけない」と言われま

した。しかし、実際ハンガリーに来てみると全く土臭くなく、やはりその土地に行くと、作曲家と同じ空気を吸わないと分からないものがあるのだな、と実感しました。帰国してからはハンガリー音楽の良さ、作曲家たちの裏話、そして私の先生の素晴らしい右手の使い方、音楽の作り方を沢山の人の伝えられると良いな、と思っています。

留学する前は7年間一人暮らしをしていましたが、この短い2年の留学先での一人暮らしは本当に孤独で、日本での一人暮らしとは比べ物にならない程寂しかったです。だからたまには、友達とでも外食をしたり、家で料理したり、散歩をしたり、あまり自分を追い込み過ぎず、辛い時は誰かに話したり、自分なりのリセット法を見つけることをお勧めします。困った時は恥ずかしがらずに周りの人に頼るといことも大事です。もちろん、何も努力せずに最初から頼る事はまた話が違いますが、こちらの人達は私達が思っている以上に優しく、本当に親切にしてくれます。

語順が違ってても発音が違ってても恐れずに、積極的に話しかけて、沢山の友達を作る事をお勧めします。私はいつも笑顔でいることを心掛けていますが、それもあって沢山の素敵な人たちと出会えました。

ここハンガリーで過ごした日々は、私の大学生生活4年間よりも濃く、とても充実していて、心からハンガリーに留学して良かったと思っています。ここで見た景色、美味しい料理の味、友情、愛情などこちらの日々で抱いた感情など、全てがこれからの私の音楽、そして人生のスパイスになる様にしたいです。

最後になりましたが、こちらでお世話になった先生始め、皆様には心から感謝しています。有難うございました。

(はなおか・さき)



留学生

留学生自己紹介

ピアノと向き合った日々

リスト音楽院大学院ピアノ科
服部 志野

3年間の留学を終え、7月末に日本へ帰国することになりました。

日本で音楽大学を卒業後、もう少し音楽の勉強を続けたいとは考えていたものの、具体的にはどうしたいのか自分でもわからずにいました。そんな時、友達が海外へ留学すると言っているのを聞いて羨ましいと思っている自分に気付き、大学4年の夏に、毎年岐阜で行われている、リスト音楽院マスターコースの留学選考会を受けました。なんとか合格することができ、ハンガリーに留学することになりました。

初めての海外暮らしでちゃんと生活していけるのか心配だったため、まずは1年間だけ、パートタイムで留学することにしました。しかし実際に留学してみると、1年で帰るなんて絶対嫌だという気持ちが強くなり、その年にリスト音楽院の大学院を受験しました。

ブダペストに留学して一番良かったと思うことは、クラシックの本場の空気を感じながら、音楽に集中できる環境に身を置けたことです。私が住んでいたアパートが、ちょうどリスト音楽院本校舎の目の前にあったからでしょうか。日々本校舎のホールへ音楽を楽しみにくる人々の姿を目にし、又オペラ座やオペレッタ劇場も徒歩5分のところにあったため、本当に音楽に囲まれて生活しているように感じました。

そしてもう一つ、音楽に一生懸命取り組む留学生の仲間や、素晴らしい先生方に出会えたことです。周りの留学生たちのやる気に圧倒されました。留学する目的は色々だと思いますが、皆個々の目標に向けて一生懸命取り組んでいて、コンサート活動や弾き合い会などを積極的に行っていました。同時期に留学してきた子で、同じ門下生でとても上手な女の子がいました。留学して一年半の間、私のレッスンの前が、いつも彼女のレッスンでした。ほんのワンフレーズ弾

いただけなのに音色が違い、私はとても衝撃を受けました。もちろん、先生は素晴らしいピアニストなので、素晴らしい演奏でいつも感動するのですが、自分と年齢も近い留学生が素晴らしい演奏をしているのを間近で見て、ショックを受けたのです。あまりの違いに落ち込んでしまったりもしました。この頃から、自分ももっと上手になりたいと強く思うようになり、夜も学校に練習に行くようになりました。

上手になりたいとは思っていたものの、どうし



たら上達するのかかわからずにいた時に気になったのが、室内楽の先生に言われたことでした。私は1年目、室内楽として2台ピアノのレッスンを受けていたのですが、指がしゃかりと打鍵できていないことや、体に余分な力が入りすぎていることをよく指摘されていました。私は自分の弾き方が嫌いで、でもどうしたら改善できるのかもわからず、ずっとその解決策を見いだせずにいました。ところが、その先生が私の弾き方について指摘してくださったので、もっとしっかり教えてもらいたいと思い、次の年もその先生に習うことにしました。ピアノの打鍵の仕方や体の使い方など基本的なことを教えてもらいました。朝起きてからすぐ基礎的な練習を始めて、常に怠ってはいけなと言われてきましたが、正しい奏法の感覚をつかむためにひたすら短いフレーズを繰り返し弾くのは忍耐のいることで、1人ではとてもできなかつたと思います。辛抱強く付き合ってくれた先生には本当に感謝しています。

また、有名なハンガリー人ピアニストは学生の頃どうやって練習していたかというようにエピソードが聞けたのも良かったです。練習方法がわかってきてからは、どんどんピアノ

を弾くのが楽しくなりました。留学2年目を終えて帰国した折のコンサートでは、色々な方から、弾き方や雰囲気が変わったと褒めていただけてとても嬉しかったです。

3年間専攻のレッスンとして、ファルバイ先生とハルギタイ先生のもとで学べたことも、私にとってとても幸運なことでした。両先生ともレッスンの始めに、「弾けていなくても通して弾くように」と言われました。「コンサートのように弾いてね」とおっしゃいました。先生方は、私がどのように曲を解釈し、どんな風に弾きたいのかを聞いていたのです。

今までの私は、レッスンに対してどこか受け身でいたところがあったのですが、そうではなく、毎回のレッスンにおいて、演奏でもっと自分の考えを提示していかなければいけないのだと気付きました。また、そして時には、突然にコンサートや弾き合い会をするので何か弾いたらと言われることがあるので、いつでも人前で弾けるように準備をしておかなければいけないのだと思いました。

先生方は、叱ったり厳しくしたりするのではなく、演奏や態度で私のピアノに対する考えの甘さに気付かせて下さったので、私はピアノとの向き合い方を考え直すことができました。また先生方は、音楽についてだけでなく、生徒の精神的な部分までよく見てくださいました。先生は私が悩んでいるとすぐに気付き、どうしたのかと話を聞いてくださったり、時には何も言わず、レッスン後にそっとホットチョコレートを差し出してくださいました。留学の集大成として5月に行ったディプロマコンサートの前には、緊張している私を見て、たくさんアドバイスもしてくださいました。あたたかく見守って下さった先生方がいたから、私は3年間自分らしく音楽を学べたのだと思います。

これから岐阜の地元へ戻り、ピアノを教えることや、演奏活動に力を入れていきたいと思っています。3年間留学させてくれた両親、ハンガリーで支えてくれた皆様、そして日本で応援してくれた人たちに感謝の気持ちを伝えたいです。

(はっとり・しの)

留学生自己紹介

忘れられない時間

エトヴェシュロラード大学社会科学部
上原 彩希

ブダペストのエトヴェシュロラード大学社会科学部に留学しています、明治大学3年の上原彩希です。

私は留学を決意する際に2つの動機がありました。

1つは語学力を向上させることです。私の学部は英語に力を入れており英語授業が必修、選択ともに開講されていますが、授業の雰囲気は典型的な日本の大学という印象が強くありました。そう感じる中、英語を使わないとコミュニケーションが取れない、自分の意見を伝えられない、そういった環境に身を置くことで語学力を高めたことより強く思うようになりました。

もう1つは幅広い視野を身に付けるところです。日本では学べないことや経験できないこと、また自分が知らないことがたくさんあるはず。自ら異なる世界に飛び込み、様々なことを吸収することで自分を成長させたかったのです。

留学前、そして現地到着後、多くの人が私に尋ねました。どうしてハンガリーを選んだのか、と。たいていの人は語学、とくに英語を上達させるためには公用語が英語の国を選ぶのが最適だと考えると思います。私もその1人でした。でも、結果的に選んだのはハンガリーでした。アメリカに興味はなかったわけではありませんが、友人の多くがアメリカの大学を志望する中、周りとは異なる経験をしたかったからです。留学は語学だけではなく文化や歴史を学ぶことができる時間だと思い、ハンガリーは私にとって魅力的な国だったので。公用語が英語でないという点で、両親はハンガリーという選択に不安を抱いていたようですが、私はその意見を押し切ってハンガリーを第一志望に決め、留学のチャンスを掴みました。

ハンガリーでの留学生生活を振り返ってみ

ると、全てが意味のあるものだったと感じることが出来ます。しかし、この1年間様々な問題に直面し自分が無知だと思知らされた面が多々ありました。両親の懸念通り、街中では英語が通じず苦労したり、アパートの契約に関して問題があったりなど。友人に力を借り、また両親と連絡を取って助けを求めたこともありましたが、最終的には全て自分で対処しなければなりません。自分の思い通りに物事が運ばないことが続き、留学当初は毎日がただただ長く、疲れてしまう日々でした。しかし、様々な壁を突破できない自分が情けなく思え、こうした気持ちに逆私を奮い立たせました。笑われても構わないから分からないことがあれば人に聞く、物事を後回しにしない、積極的に行動する。こうして物事をポジティブに捉えるように心掛けるようになってから自分1人で



こなせることも徐々に増えていき、自信に繋がりました。予期せぬ出来事にも落ち着いて対応できるようになり、僅かではありますが自分が自分自身の中で成長を感じています。

一方、大学ではまた異なる問題を抱えました。最大の難点はやはり語学力です。授業は全て英語で行われるため、毎週課題の文献を読み、内容を理解するのに苦労しました。私とは対照的に、他の留学生やハンガリー学生は英語力、とくにスピーキング、リスニング力が高く、彼らのレベルに圧倒され、授業や会話について行けず戸惑うこと

が何度もありました。しかし、周りの学生の積極的な発言や質問による授業への貢献はとても刺激的なもので、自分がこれまで経験してきたものとは異なる学びの場を体感したと同時に、自分もその輪に入りたいと鼓舞してくれたのです。十分とは言えないものの授業中発言することが出来ました。また、授業内容が理解できた時は学ぶことの楽しさと充実感、そして日々の成果を感じる事ができました。

私の留学生活は実りの多い、充実したものでした。留学には日々の努力は不可欠です。しかし、私が最も大きな要素と考えるのは人との出会いです。留学中、他国からの留学生だけでなくハンガリー人学生や自分と同じ立場である日本人学生、在住の方々など数多くの人々と出会い、数えきれない大切な思い出を作ることができました。とく

に、いつも私を励まし支えてくれたサポーターの学生とご家族には感謝の気持ちでいっぱいです。また、日本語を学ぶハンガリー人の方々とも知り合うことが多く、彼らの熱心に勉強する姿や日本に対する愛情には大きく心を動かされました。ハンガリーにおける全ての出会いは私にとってかけがえのないのです。私は彼らと過ごした日々を決して忘れません。そして思います。いつか絶対にこの地に戻って来たいと。

(うへはら・さき)

みどりの丘補習校

当補習校は2005年に設立され、昨年度10周年を迎えました。2008年からは文部科学省から海外補習授業校として認定を受けています。経営母体はハンガリーで正規に登録されているZöld Domb 財団で、ブダペスト2区からトゥルクヴィース小学校の教室を借りて授業を行っています。設立当時は本当に小規模の学校でしたが、現在では小学部1年生から6年生、中学部1年生と3年生の8学級あり、平日は現地学校または国際学校へ通う39名の児童生徒が土曜日の午前中、国語の勉強に励んでいます。

講師は現在8名おり、全員現地採用の日本人です。補習校での勤務年数が3-4年目という経験を積んできた先生方が増え、喜ばしく思っているところです。世界中の小規模の補習校が同じ問題を抱えているようですが、当補習校でも家庭の事情でなかなか長期に勤務していただけないことが多く、講師間での経験の伝達や共有に苦労してきました。しかし今年度からは、経験を積んだ先生に引継ぎただけできるようになったので、心強く思っています。

補習校は毎週土曜日、国語だけを勉強しているわけではありません。学校行事もあります。4月の入学式、始業式を始め年に数回行事が行われます。4月と3月に行う式典は子ども達に日本の「式」を経験してほしいとの願いから、日本の形式で行っています。きちんと立つこと、一列に並ぶこと、しっかり頭を下げお辞儀をすることなど、ハンガリーの学校や国際学校では習わないことを、式典を通して学んでもらいます。

5月には遠足があります。普段はあまり交流のない異学年の児童生徒や担任以外の先生との縦の交流、親睦が目的です。今年は学校近くの鍾乳洞へ行きました。学年が違う子ども達で作られたグループで歩いて鍾乳洞まで行き、午前中はグループごとに旗を作るなど色々な活動をして、昼食後に4年生以上が鍾乳洞を見学しました。鍾乳洞の見学ではハンガリー人のガイドさんが説明をしてくれましたが、ハンガリー語がわからない児童生徒

には日本語通訳が必要でした。通訳をしてくれたのは、補習校を一昨年卒業した男の子でした。卒業生が通訳をする姿はとても輝いて見えたのではないかと思います。

9月には、日本人商工会と日本人学校が主催されているふれあい運動会に、毎年参加させて頂いています。現地校や国際学校では日本のような運動会がないので、パンくい競争や徒競走、リレーなど親子共々楽しみにしています。近年は保護者が参加できるリレーもかなり盛り上がり、応援にも気合がはいります。外国人の夫や妻には組体操や応援合戦が珍しく、そのレベルの高さに驚いています。

3学期初めには、カルタ大会が開かれます。小学部は俳聖カルタを使い、中学部は百人一首を使って行います。毎年行っているため、子ども達も覚えているカルタの数が年々増え、学年が上がるにつれ白熱の接戦となります。

2月には1年の総まとめでもある学習発表会が開かれます。教科書の単元の音読もあれば、詩の朗読、劇もあります。1週間に4時間、その中で教科書をこなしていかなければならないので、学習発表会の練習時間は限られますが、毎年皆の頑張りをみるのができるよい機会となっています。

このように毎週の授業や行事がある補習校ですが、運営は保護者が行っています。永住家庭だけでなく駐在員家庭の保護者も入り、色々な案や意見を出し合っています。運営委員会に入っていない保護者にも、いろいろな係を担当してもらっています。補習校の保護者の皆さんは本当に協力的で、感謝しています。

補習校は年間約35日で、授業時間がとても少ないです。その中で日本の教科書を使って子ども達は国語を学んでいます。授業がスムーズに進んでいくためには、家庭学習はなくてはならないものです。数年前から「音読」にとても力を入れています。一緒に読んだり、聞いてあげたり、高学年になると振り仮名をふる手伝いをしたりと、保護者の協力が不可欠です。保護者に負担はかかりますが、「音

読」がしっかりできると、教科書の内容がよく理解でき、授業への参加も活発になります。そして保護者が「音読」をサポートする中で、いろいろな会話もうまれます。小学6年生の単元には原爆ドームに関するものがありますが、娘がそれを勉強していた時、原爆について、戦争について、戦後についてと、たくさん話をしたことを憶えています。彼女が現地学校で学んだハンガリーの戦後の歴史と日本の歴史を比べたりもしました。このような会話は日常生活ではなかなかできません。子ども達は教科書を使って国語を勉強するだけでなく、それぞれの単元を通して日本の歴史や文化も学んでいるのだなと実感しました。

補習校で学んでいる子ども達の家庭環境は様々です。多くの家庭が二重国籍ですが、中でも母が日本人か父が日本人かによって、家庭での日本語とのふれあい度も違ってきます。学年があがるにつれ、平日に通う学校で使う言語の語彙がどんどん増え、生まれてから日本語でしか話していない家庭の子どもでさえ、日本語の文章の中にハンガリー語の単語が入った文を話したりします。補習校の宿題を嫌い、子供が疲れている姿を見ると、補習校に通わず意味があるのだろうか、と考えることが何度もありました。しかし、在校生の前で答辞を読む娘や同級生を見て、やはり続けてきてよかったと思うことができました。答辞の内容は、「今まで補習校へ通う意味がわからず、国語の勉強も嫌だったが、現地校での受験の面接時、自分がハンガリー人であると同時に日本人でもあることを意識し、これまで補習校へ通い学んだことを通して日本人であることを誇りに思えた」、という内容でした。

子ども達にとっても保護者にとっても補習校に通うことは大変なことです。国語の勉強を通して日本を知り、日本人でもあることに誇りをもてる児童生徒が育つ補習校を今後も目指して行きたいと思っています。

(こしの・えみ 補習校運営委員長)





コルナイが綴る 20 世紀中欧の歴史証言

池田信夫「21世紀最初の10年ベスト経済書」第2位にランク
「週刊ダイヤモンド」2006年ベスト経済書第9位にランクイン

コルナイ・ヤーノシュ自伝

—思索する力を得てコルナイ・ヤーノシュ【著】 盛田常夫【訳】

◆好評発売中！ ◆定価 4935 円（税込） ◆A 5 判 / ISBN 4-535-55473-0  日本評論社



体制転換 の経済学

黄色の教科書シリーズで知られる専門学部の定番テキスト。体制転換の理論と転換直後の現状を分析。各大学で教科書として使用。

盛田常夫著

第一部 社会主義経済の失敗

社会主義崩壊をもたらした社会的退化への論理を構築。交換経済と再分配経済の比較分析に新たな視点を提供。

第二部 ポスト社会主義経済

体制転換の過渡期の問題をすべて取り上げ、解決の道筋を示す。地域による体制転換の違いを解明。

■ 新世社 新経済学ライブラリー20 定価2781円(税込)



なぜハンガリーは独創的な科学者を輩出したのか

20 世紀を創ったハンガリー人 マルクス・ジョルジュ【著】 盛田常夫【編訳】

■ 定価 3045 円（税込） A 5 判

■ ISBN 4-535-78331-4

異星人伝説

「週刊文春」(米原万里)、「週刊ダイヤモンド」(北村伸行一橋大学教授)で書評。
ハンガリーは 20 世紀の科学の発展に貢献した多くの頭脳を輩出した。大きな足跡を残した科学者たちの評伝。

体制転換20年の歴史的・理論的総括の書



ポスト社会主義の政治経済学

体制転換20年のハンガリー：旧体制の変化と継続

新しい概念を駆使して、体制転換以後の中欧社会の状況を分析。

日本経済新聞(2010年3月21日)ほか、多数の書評。

旧来の定説を覆し、新たな知見を広める革新の書。

盛田 常夫著 日本評論社 定価3800円